

日韓否定接頭辞の類似点と相違点

—「不」の品詞転換機能を中心として—

朴 景淑 (名古屋大学博士後期課程)

要旨

接頭辞は接尾辞と異なり、基本的には語の品詞を決定する力を有していないと言われているが、否定の意味を表す接頭辞「不・無・非・未」は、結合語の品詞を変化させ、前述の接頭辞とは異なる性質を持つ。本稿では、日韓両言語の否定接頭辞の特徴を概観した上で、両言語の類似点である品詞転換機能に着目し、「不」の下接語と結合語の品詞性について対照研究を行った。日本語の「不」の結合前後は、形容動詞性名詞に転換する機能がみられる。下接語が動名詞である場合、その結合語は動詞性を失い、名詞または形容動詞性名詞になる。韓国語において、下接語が形容動詞性名詞である場合、品詞転換機能は日本語と類似しているが、下接語が動名詞である場合、「不」と結合した後の多くの語は動詞性の形態を保有している点で日本語と異なる。それは、日本語においては、否定要素を述語の前に置くことができず、韓国語の固有語では否定要素を述語の前に置く形態があるため、形態上で受け入れやすいことが考えられる。また、意味上では、日本語の「不」の結合語は動詞性よりも状態性を持ち、韓国語の「不」の結合語は動詞性も表すことができる。

1. はじめに

接頭語とは語構成要素の一種であり、接辞のうち、語基の前に付くものをいい、接尾辞と異なり、基本的には語の品詞を決定する力を有していない¹。

しかし、否定の意味を表す接頭辞²「不・無・非・未」は、結合語³の品詞を変化させ、前述の接頭語とは異なる性質を持つ。

日本語の接辞には和語と漢語があるように韓国語の接辞においても固有語⁴と漢字語がある。固有語の接頭辞は一般的に意味を添加する機能のみ有するのに対し、漢字語には語基の品詞性を変化させる接頭辞が多くみられる⁵。

上述のように日本語と韓国語の否定接頭辞は、下接語の品詞を転換させる点で類似した機能を持っている。本稿では、両言語の否定接頭辞全体の類似点と相違点を概観した上で、日韓両言語の類似点の一つである品詞転換機能に焦点を当て、その類似点と相違点を明ら

¹ 『日本語学研究事典』の「接頭語」の項目を参照。

² 野村(1977)は、接辞を接頭辞と接尾辞に分け、「接頭語と接尾語という言い方もあるが、厳密に言えば語ではないことから「辞」を使用している」と述べている。本稿では野村(1977)に従い、接頭辞、接尾辞という用語を使用する。

³ 本稿では否定接頭辞の後に付く語を下接語といい、否定接頭辞と結合した後の語を結合語という。「不道德」を例にして説明すれば、「道德」は「不」の下接語であり、「不道德」は下接語「道德」が「不」と結合した後の結合語である。

⁴ 塚本(2008)では、日韓両言語の語種について両言語ともにその言語内で生まれた語(一般的に日本語では和語、朝鮮語では固有語とそれぞれ呼ばれ、名称が異なるだけ)か、他の言語から取り入れられた借用語かにまず大きく区分され、その借用語はさらに、大多数を占める漢語と、残りを占める西洋語(いわゆる外来語)に区分されると記述されている。

⁵ 노명희 No myeonghui(2005:87-88)を参照。

かにしたい。

2. 日本語と韓国語の否定接頭辞の特性

本章では、先行研究を踏まえ、日韓両言語の否定接頭辞の特徴について概観する。

2.1 日本語の否定接頭辞の特徴

山田(1936:571-593)は、接辞を接頭辞と接尾辞に大別しており、接頭辞は体言、用言、副詞の上に加え、その語調または意義を添えており、接尾辞は意義を添えるものと、一定の資格を与えるものに分類しており、「不」と「無」は、一定の意義を添える接頭辞であることを指摘したが、「不」と「無」の下接語と結合語の品詞性には触れていない。

野村(1977)では、漢語系接頭辞のうち、「無・不・非・未」は、否定の意味を添える接頭辞であり、一般的に、接頭辞は、意味を添加するだけで、結合対象となる語の品詞性を変える働きはないといわれるが、否定の接頭辞は、結合形全体にいわゆる形容動詞の語幹相当の品詞性を与える点で共通していると述べている。

さらに、野村(1973)では、否定接頭辞「不・無・非・未」を取り上げ、その特徴を以下の①～③にまとめている。

- ① 造語要素の意味的な結合関係が、他の前部分にくる一字漢語とちがって、一般の構文上の修飾関係の順序と異なる。(無関係・不公平・名女優・食中毒)
- ② 和語に同様の用法を持つ言語単位が発達していない。(音無しの構え・上着無しで外出する・親知らず・向う見ず・ノーカーデー)
- ③ いわゆる形容動詞の語幹を形成する(無意味な・不景気な・非常識な)

以上の先行研究からわかるように、日本語の否定接頭辞は、意味を添加するだけでなく、品詞転換機能も持っており、意味的な結合関係が修飾関係の接頭辞及び和語の語順と異なる。次に韓国語の先行研究を踏まえ、韓国語の否定接頭辞の特徴について概観する。

2.2 韓国語の否定接頭辞の特徴

노명희 No myeonghui(2005:178)は、字音接頭辞の語基に対する機能によって修飾性字音接頭辞と叙述性字音接頭辞とに分け、「불 bul(不)・무 mu(無)・비 bi(非)・미 mi(未)」⁶は、語基に叙述的機能を果たす叙述性字音接頭辞として否定の意味を表しており、その特性は、語基に叙述性を付与し、かつ品詞性を変えることにあり、品詞性を変える場合、とりわけ「하다 hada」との結合に影響を与えると記述している。また、노명희 No myeonghui(2005:151)の「否定を表す字音接頭辞」についての記述により、韓国語の「불 bul(不)・무 mu(無)・비 bi(非)・미 mi(未)」の特徴を以下の①～③にまとめることができる。

- ① 固有語の語順と異なり、漢文の語順に従い、韓国語においては単語として定着している。
- ② 語基の品詞性を変えることが可能である。
- ③ 特定の否定接頭辞につく語基もみられるが、複数の否定接頭辞と結合できる語基も

⁶ ハングルの直後のローマ字は発音を示し、括弧内は対応する日本語の漢字を示す。

みられる。

このように日韓両言語における否定接頭辞の特徴は極めて類似しており、その相違点を明らかにする必要がある。本稿では日韓両言語の類似点の一つである品詞転換機能に着目し、「不」を例として取り上げ、両言語の下接語と結合語の品詞性について考察を行う。

3. 日本語の「不」の下接語と結合語の品詞性

拙稿（朴 2015）は、NTT データベースシリーズ『日本語の語彙特性 第7巻』⁷により抽出した「不」に後続する2字下接語を名詞(N)、動名詞(VN)、形容動詞性名詞(AN)⁸に分類し、分析を行った。その分類結果に従い「不」の下接語と結合語の品詞性について考察を行う。語の品詞性については『デジタル大辞泉』『日本国語大辞典』及び現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NTの用例を参照とし、形容動詞性の判定は主に「結合語+な+N」の形態として使用されるか否かによって判定する。

3.1 名詞下接語の場合

「不」の名詞下接語は全部で24語あり、その結合語はすべて形容動詞性名詞になる。「不規則」を例として説明する。

(1) a 規則がある／規則を守る／文法規則⁹

b 不規則な生活がつづく。

高野正博 2002『大腸の病気』

(1)の「不規則」の下接語「規則」は、「規則がある」「規則を守る」「文法規則」のように名詞のみの用法を持っているが、「不規則」は「不規則な生活」のように連体修飾ができ、形容動詞性を持つ。「*規則な生活」とは言えないように、「規則」は、「不」が前接することによって、形容動詞性名詞になる品詞転換がみられる。

このように「不」の名詞下接語が形容動詞性名詞になる語は24語あり、次に示す。

(2) 下接語 N→結合語 AN(24語)

不規則 不条理 不経済 不成績 不衛生 不義理 不面目 不見識 不合理
不体裁 不道徳 不本意 不作法 不人情 不気味 不景気 不都合 不行儀
不行跡 不行状 不器量 不徳義 不採算 不本意

以上、「不」の下接語が名詞である場合、下接語と結合語の品詞性は以下のようにまとめることができる。

⁷ 考察対象とするデータはNTTデータベース『日本語の語彙特性 第7巻』である。『日本語の語彙特性』は、1985年から1998年までの14年間に発行された朝日新聞の紙面に基づいて朝日新聞社が作成した、全記事データ（単語数341771語）をコーパスとして用いたデータである。

⁸ 名詞、動名詞、形容動詞性名詞は以下のように分類している。

・名詞：名詞だけの品詞の語（例：規則・条理・成績…）。

・動名詞：サ変動詞に成り得る名詞（例：許可・調和・飽和…）。

・形容動詞性名詞：形容動詞に成り得る名詞（例：穏当・可能・健康…）。

⁹ 出典が明記していないものは筆者による作例である。また、用例の下線は筆者によるものである。以下同様。

下接語 N→結合語 AN (N・A な)¹⁰

「不」の名詞下接語は24語あり、その結合語はすべて名詞下接語から形容動詞性名詞の結合語に転換される。次に、「不」の下接語が動名詞である場合、「不」と結合前後の品詞性について観察する。

3.2 動名詞下接語の場合

「不」の下接語が動名詞である場合、結合語は形容動詞性名詞になる語とならない語とがみられる。「不徹底」の下接語と結合語を例にして説明する。

(3) その内容には、「良好な人間関係」に配慮するあまり不徹底な面が目立つ。

中窪裕也 (ほか) 2003『労働法の世界』

(3)の「徹底」は、サ変動詞に成り得る動名詞である。「不」の前接した「不徹底」は「*不徹底する」の用例は見られず、「不徹底なN」の用法がみられる。即ち、動名詞の「徹底」は「不」と結合後に動詞性を失い、形容動詞性名詞として使用される。以下に動名詞下接語が「不」との結合により形容動詞性名詞に転換する語例を示す。

(4) 下接語 VN→結合語 AN(31語)

不調和 不飽和 不徹底 不用意 不摂生 不特定 不統一 不承知 不信用
 不遺憾 不消化 不養生 不成功 不確定 不連続 不整頓 不均衡 不信心
 不協和 不整合 不注意 不勉強 不用心 不細工 不首尾 不案内 不同意
 不適應 不一致 不利益 不始末

また、動名詞下接語の場合、「不」と結合した後、名詞になる語例もみられる。

(5) 例えば、審理が長引き、終局判断ではじめて仲裁契約の不成立を理由に却下されると、訴えの提起を時効期間内にすることができなくなるおそれがある場合などである。

安藤一郎 2001『建築紛争処理手続の実務』

(5)の「成立」は動名詞であり、「*成立なN」の形態としては使用されていない。「不成立」は「*不成立する」「*不成立なN」とは言えず、もっぱら名詞として使用されている。

上述のように、動名詞下接語の場合、「不」の結合語の一部は動詞性を失い、形容動詞性への転換はみられず、もっぱら名詞性を有する。次の(6)に語例を示す。

(6) 下接語 VN→結合語 N(17語)

不介入 不起訴 不賛成 不拡大 不遡及 不干涉 不処分 不作為 不合格

¹⁰ 「Aな」は対象となる語が形容動詞である場合の形態を示す。同様に「Vする」は、する動詞を表す。

不履行 不納付 不信任 不侵略 不順守 不成立 不生産 不許可

(3)~(6)の分析により「不」の下接語が動名詞である場合、下接語と結合語の品詞性は以下の二つのパターンにまとめることができる。

① 下接語 VN (N・V する) → 結合語 AN (N・A な)

② 下接語 VN (N・V する) → 結合語 N

3.3 形容動詞性名詞の下接語の場合

「不」の下接語が形容動詞性名詞の場合、結合語も形容動詞性を持っており、品詞転換はみられない。

(7) a 異議の理由として非両立性を挙げることは簡便かつ穏当な方策といえる。

中村道 2003 『21 世紀国際社会における人権と平和』

b 不穏当な言い方であることは充分承知しています。

山崎敏子 1998 『告発-人工透析死』

(7)のように、下接語の「穏当」は形容動詞性を持ち、その結合語の「不穏当」も「不穏当な N」という形態として使用していることから、形容動詞性を持っており、結合前後の品詞転換がみられない。下接語が形容動詞性名詞の語例を(8)に示す。

(8) 下接語 AN→結合語 AN(36 語)

不穏当 不活発 不得意 不熱心 不自由 不鮮明 不可能 不完全 不必要
 不健康 不適任 不適格 不格好 不器用 不透明 不健全 不親切 不誠実
 不確実 不機嫌 不明瞭 不公正 不正確 不公平 不適當 不明朗 不平等
 不愉快 不明確 不風流 不充分 不十分 不自然 不正直 不適切 不名誉

また、形容動詞性に動詞性も兼ねる下接語(ANV)は、「不安心」「不安定」「不満足」「不相应」「不謹慎」「不評判」「不調法」「不都合」の 8 語がみられ、その結合語はすべて動詞性を失い、形容動詞性名詞になる。

以上、日本語における「不」の下接語と結合語の品詞性をまとめると表 1 のようである。

表 1 日本語の「不」の下接語と結合語の品詞性

下接語	語数 (%)	結合語	語数 (%)
N	24(100%)	AN(N・A な)	24(100%)
VN(N・V する)	48(100%)	N	17(35%)
		AN(N・A な)	31(65%)
AN(N・A な)	36(100%)	AN(N・A な)	36(100%)
ANV(N・V する・A な)	8(100%)	AN(N・A な)	8(100%)

日本語の「不」の下接語が名詞である場合、その結合語は形容動詞性名詞になる。下接語が動名詞である場合は、動詞性を失い、名詞になる結合語と動詞性を失い、形容動詞性名詞になる結合語とがみられ、下接語が形容動詞性名詞の場合は結合前後に品詞転換がみられない。また、下接語が形容動詞性名詞に動詞性も兼ねている語は、「不」と結合した後に動詞性を失い、形容動詞性名詞になる。

次に韓国語の「불 bul(不)」の下接語と結合語の品詞性について考察を行い、日本語との類似点と相違点を見る。

4. 韓国語の品詞性及び日本語との対応関係

本章では、4.1に韓国語の品詞がどのように分類され、日本語とどのように対応しているかについて観察し、4.2では韓国語の辞書により「불 bul(不)」の意味及び3字結合語の語例を確認した上で、韓国語の「不」の品詞転換機能について考察を行う。

4.1 韓国語の品詞性

李(2002:44-45)では韓国語の品詞性について次のように述べている¹¹。

漢字語は、実体概念を表す語は自立して名詞になり、属性概念を表す語で動作性を持つものは、日本語の場合「する」を、韓国語の場合「하다 hada」をつけてそれぞれ「する動詞」と「하다 hada 動詞」になる。また、状態性を持つものは、日本語においては「な・に」などをつけて「ナ形容詞」、韓国語においては動詞と同形の「하다 hada」をつけて「하다 hada 形容詞」になる。

上記の日韓両言語の品詞対応関係に基づき、形態上韓国語と日本語の各品詞との主な対応関係を以下の表2にまとめる。日本語では形容動詞、韓国語では形容詞と言われているが、対照の関係上、合わせてAと表記し、形容詞性名詞はANと表記する。また、副詞性はADと表記する。

表2 日韓両言語の形態上の対応関係

品詞性	日本語	韓国語
N	Nが Nは Nを …	N이 i/가 ga N은 eun/는 neun N을 eul/를 reul …
VN	Vする Vする N Vした N …	V 하다 hada V 하는 haneun N V 한 han N …
AN	Aだ Aな N Aに V …	A 하다 hada A 한 han N A 하게 hage V …

¹¹ 引用部分のローマ字及び括弧内の日本語訳（直訳）は筆者による。以下同様である。

4.2 韓国語の「불 bul (不)」の意味と語例

本節では韓国語の『국립국어원 표준국어대사전』(国立国語院 標準国語大辞典)¹²により「불 bul 不」の3字結合語を抽出し、同辞書の品詞分類と用例、および韓国の国立国語院に開示されている말뭉치(コーパス)¹³を用いて使用実態を確認する。

『標準国語大辞典』によれば、韓国語の「不」は次のような意味を持っている。

부 bu(不)¹⁴ 接辞

(‘ㄷ’, ‘스’からはじまる名詞の前に付いて)「～でないこと」「～しないこと」「合わない」の意味を添加する接頭辞。

부도덕(不道德)/부정확(不正確)/부자유(不自由)…

불 bul(不) 接辞

(一部の名詞の前に付いて)「～でないこと」「～しないこと」「合わない」の意味を添加する接頭辞。

불가능(不可能)/불경기(不景気)/불공정(不公正)…

『標準国語大辞典』の記述により、韓国語の「不」は名詞の前に付いて、「부 bu」と「불 bul」二つの発音がみられるが、後続の字の子音と関わりがあり、意味の相違はみられない。『標準国語大辞典』で選出した「不」の結合語は全部で133語あり、『日本国語大辞典』の「不」の3字結合語の語例と対照した結果、日韓同形語は91語(68%)、韓国語のみの語は42語(32%)みられ、韓国語において半数以上が日韓同形語である。

(9) 日韓同形語(91語)¹⁵

不可能	不徳義	不道德	不規則	不自然	不自由	不適格	不適當	不適任
不適切	不適合	不正当	不正直	不公正	不公平	不均一	不均衡	不整合
不正確	不条理	不調和	不注意	不健全	不見識	不満足	不明瞭	不分明
不相当	不鮮明	不誠実	不安全	不安定	不穩当	不完全	不愉快	不利益
不人情	不徹底	不聰明	不充分	不親切	不透明	不便利	不平均	不平等
不必要	不合理	不確實	不確定	不活発	不名誉	不景気	不経済	不規律
不起訴	不本意	不消化	不随意	不品行	不連続	不人望	不適応	不得意
不得策	不介入	不謹慎	不服従	不相応	不摂生	不成功	不成立	不遑及
不受理	不信仰	不信用	不信任	不安心	不融通	不履行	不認可	不一致
不賛成	不参加	不採用	不統一	不飽和	不特定	不評判	不許可	不拡大
不節制								

¹² 『국립국어원 표준국어대사전』(国立国語院 標準国語大辞典)は、標準語を中心に北朝鮮語、方言、古語など50万単語が収録されている。本稿では標準語のみ考察範囲とし、以下『標準国語大辞典』と称する。

¹³ 国立国語院に開示されているコーパスは「21세기 세종계획 말뭉치(21世紀世宗計画コーパス)」における国語基礎資料であり、現代文語と現代口語に分けられており、新聞、雑誌、書籍、その他出版物、放送電子ファイルなど60,558,573語句が収録されている。本稿では現代文語を用いて用例の検索を行う。

¹⁴ ハングルに対するローマ字表記及び日本語訳は筆者によるものである。

¹⁵ 韓国語の漢字表記は日本語の字体と異なるが、本稿では便宜上日本語の漢字で表記する。

(9)のように「不」の結合語では数多くの日韓同形語が存在するため、日韓両言語の「不」の下接語と結合語の品詞転換機能の相違点を明らかにすることで、両言語学習者の誤用を防ぐことができると思われる。

国立国語院の말뭉치(コーパス)で検索した結果、韓国語の「불 bul(不)」の結合語の使用例がゼロの語も少なからず存在する。次の5では国立国語院に開示されている말뭉치(コーパス)に使用例のある語を対象とし、「불 bul(不)」の下接語と結合語の品詞性を考察し、日本語と対照研究を行う。

5. 韓国語の「불 bul(不)」の下接語と結合語の品詞性

韓国語の「불 bul(不)」の下接語は日本語と同様に、名詞、動名詞、形容詞性名詞に分けられ、動名詞に加え、形容詞性を兼ねる語や形容詞性名詞に加え、副詞性を兼ねる語がみられる。次にそれぞれの品詞性を持つ下接語が「불 bul(不)」と結合した後の品詞性について観察する。

5.1 名詞下接語の場合

韓国語の「불 bul(不)」の下接語が名詞である場合、形容詞に転換する語と転換しない語がある。

- (10) a * 경기하다 Gyeonggi-hada(*景氣 hada)
 b * 불경기하다 Bulgyeonggi-hada(*不景氣 hada)

(10)のように韓国語の「불경기 bulgyeonggi(不景氣)」の下接語「경기 gyeonggi(景氣)」は「hada」が付けられない名詞であり、「不」の前接した「불경기 bulgyeonggi(不景氣)」も「hada」が付けられず、名詞のみの用法がみられる。このように「불 bul(不)」の下接語と結合語ともに名詞である語例を(11)に示す。

(11) 下接語 N → 結合語 N(3語)

불경기(不景氣) 불수위(不随意) 부정기(不定期)

また、次のように名詞下接語が形容詞性名詞になる語例がみられる。

(12) a 이익을 얻다. iigeul eotda(利益を得る)

b * 이익하다 iig-hada(*利益 hada)

c * 이사의 지위를 이용하여 회사에 불이익한 거래를 할 염려가 있다.

이기수 1999 『기업법』

…isai jiwireul iyonghayeo hoesae buliig-han georaereul hal yeomnyeoga itda.

(…理事の地位を利用して会社に不利益な取引をする懸念がある。)

(12)のように「이익 iig(利益)」は、「이익을 iig-eul(利益を)」のような名詞のみの品詞を

持ち、「hada」は付けられないが、「不」が前接することによって、名詞用法のほか、「hada」が付けることができるようになり、「불이익한 거래 buliig-han georae (不利益な取引)」のように連体修飾の用法がみられる。即ち、下接語に名詞のみの品詞を有する語が、「不」が前接することにより、名詞のほか形容詞としても使用されるようになる。名詞下接語が形容詞性名詞に転換する語数は次の7語である。

(13)下接語 N→結合語 AN(7語)

부도덕(不道德) 불규칙(不規則) 부적임(不適任) 불균형(不均衡) 부조리(不条理)
불이익(不利益) 부정의(不正義)

この他、불신용 bulsinyong(不信用)1例のみであるが、名詞下接語が「불 bul(不)」と結合することにより、形容詞性、名詞性、及び動詞性を合わせて持っている語になる。

韓国語の「不」の下接語が名詞である場合、下接語と結合語の品詞性を以下にまとめる。

① 下接語 N→結合語 N

② 下接語 N→結合語 AN (N・A 하다 hada)

③ 下接語 N→結合語 ANV (N・A 하다 hada・V 하다 hada)

韓国語の「不」の下接語が名詞である場合、結合語は名詞の語と形容詞性名詞に転換する語があり、後者のほうがやや多い。次に下接語が動名詞である場合、下接語と結合語の品詞性について考察を行う。

5.2 動名詞下接語の場合

韓国語の「불 bul(不)」の下接語が動名詞である場合、次の(14)～(16)のように結合語の品詞性は下接語と同様に動名詞である。

(14)…○○씨를 불구속하는 것으로 수사를 사실상 마무리 할 방침입니다.

MBC 뉴스데스크 98

…ssileul bulgusog-haneun geos-eulo susaleul sasilsang mamuli hal bangchim-ibnida.

(…○○氏を*不拘束することで捜査を事実上締めくくる方針である。)

(15)…국회에 불출석하는 사태가 빚어지고 있다…

동아일보 2003

…gughoe-e bulchulseog-haneun sataega bijeojigo issda…

(…国会に*不出席する事態が起こっている…)

(16)또 입시철이 되면 합격하는 학생보다는 불합격하는 학생의 수가 엄청나게 많다.

정영우 1993 『교양인의 화법』

Tto ibsicheoli doemyeon habgyeoghaneun hagsaengbodaneun bulhabgyeog-haneun hagsaeng-ui suga eomcheongnage manhda.

(また入試シーズンになると合格する学生に比べて*不合格する学生の数がおびただしく多い。)

(14)の「구속 gusog(拘束)」は「하다 hada」が下接して動詞になる動名詞である。「不」と結合した「불구속 bulgusog(不拘束)」も同様に「불구속하다 bulgusog-hada(不拘束 hada)」という動詞性を持ち、「不」と結合前後に品詞転換機能がみられない。(14)~(16)の下線部はいずれも日本語で直訳すると不自然である。日本語の「不」の下接語が動名詞である場合、動詞性を失うが、韓国語の場合は動詞性を保有したままの語例が多くみられる。(17)に語例を示す。

(17)下接語 VN→結合語 VN(32語)

불간섭(不干涉) 불감당(不堪当) 불개입(不介入) 불구속(不拘束) 불복종(不服從)
 불상용(不相容) 불상정(不上程) 불섭생(不摂生) 불성립(不成立) 불소급(不遡及)
 불수리(不受理) 불순종(不順從) 불승인(不承認) 불신앙(不信仰) 불신임(不信任)
 불이행(不履行) 불인가(不認可) 불일치(不一致) 불찬성(不贊成) 불참가(不參加)
 불출마(不出馬) 불출석(不出席) 불통과(不通過) 불통일(不統一) 불퇴전(不退轉)
 불퇴진(不退陣) 불포화(不飽和) 불합격(不合格) 불허가(不許可) 불확대(不擴大)
 부적응(不適應) 불복일(不卜日)

また、韓国語の動名詞下接語が「不」と結合した後に形容詞性名詞になる語例もみられる。

(18) 중독성 간 장애는 부주의한 상황에서는 전혀 본인이 눈치채지 못하는 사이에 일어날 가능성이 크다는 것을 명심해야 한다. 이상종 1993『중년기 건강크리닉』
 Jungdogseong gan janghaeneun bujuui-han sanghwang-eseoneun jeonhyeo bon-in-i
 nunchichaeji moshaneun sa-i-e ilconal ganeungseong-i keudaneun geoseul myeongsimhaeya
 handa.

(中毒性肝障害は不注意な状況では本人が全然気づかないうちに起きる可能性が大きいというのを心に深く刻まなければならない。)

(18)の「부주의 bujuui(不注意)」の下接語「주의 juui(注意)」は「hada」が付けられる動名詞であり、結合語の「부주의 bujuui(不注意)」は「hada」形容詞に転換され、形容詞性名詞になる。

このように動名詞下接語が形容詞性名詞の結合語に転換する語例を(19)に示す。

(19)下接語 VN→結合語 AN(7語)

부조화(不調和) 부주의(不注意) 불안정(不安定) 불평균(不平均) 불확정(不確定)
 불경제(不經濟) 부정합(不整合)

韓国語の「不」の下接語が動名詞である場合、「不」と結合前後の品詞性は下記のようにまとめることができる。

- ① 下接語 VN(N・V 하다 hada)→結合語 VN(N・V 하다 hada)
- ② 下接語 VN(N・A 하다 hada)→結合語 AN(N・A 하다 hada)

日本語の「不」の下接語が動名詞である場合、結合語は動詞性を失い、名詞または形容動詞性名詞になるが、韓国語の動名詞下接語は「不」と結合後に、多くの結合語は動名詞のままで、一部の結合語は形容詞性名詞に転換する。

5.3 形容詞性名詞の下接語の場合

下接語が形容詞性を持つ語は結合語も形容詞性を持っている。ただし、形容詞性に加え副詞性も兼ねる語の結合語は、副詞性を失う。

(20) a 전화가 가능한 사람에게는 전화로… 이슬기 1989 『돈의 여행』

Jeonhwaga ganeung-han salam-egeneun jeonhwalo…

(電話が可能な人には電話で…)

b…근본적인 개혁은 불가능한 형편이었다. 강만길(외) 1994 『한국사』

…geunbonjeogin gaehyeogeun bulganeung-han hyeongpyeon-i-eoss-da.

(…根本的な改革は不可能な状況であった。)

(20)の「가능 ganeung(可能)」と「불가능 bulganeung(不可能)」はいずれも「가능한 ganeung -han(可能な)」「불가능한 bulganeung-han(不可能な)」という形容詞の連体修飾形で使用され、品詞転換はみられない。下接語と結合語ともに形容詞性名詞の語を(21)に示す。

(21)下接語 AN→結合語 AN(9語)

불가능(不可能) 부자유(不自由) 부적격(不資格) 부적합(不適合) 불균등(不均等)
불투명(不透明) 불평등(不平等) 불필요(不必要) 불명예(不名誉)

この他、形容詞性名詞に動詞性を兼ねる下接語は、「불합리(不合理)」1語があり、その結合語は形容詞性名詞になる。

また、次の(22)のように形容詞性名詞に副詞性を兼ねる下接語は、「不」と結合後に(22)-aのような「-히-hi」の付いた副詞の形態としては使用できず、形容詞性名詞になる。

(22) a…바깥에 나가 적당히 산책하면서… 이승우 1994 『엄마 이렇게 낳아 주세요』

…bakkate naga jeogdang-hi sanchaeg-hamyeonseo…

(…外に出て適当に散歩しながら…)

b 표현 자체가 부적당하게 사용되고 있음도 지적하고 있다.

마이크로소프트웨어 1990

Pyohyeon jachega bujeogdang-hage sayong-doego isseumdo jijeoghago iss-da.

(表現自体が不適當に使用されていることも指摘している。)

次の(23)と(24)に副詞性を兼ねた下接語が形容詞性名詞になる語例を示す。

(23)下接語 ANV+AD→結合語 AN(1語)

불만족(不満足)

(24)下接語 AN+AD→結合語 AN(24語)

부적당(不適當) 부적절(不適切) 부정직(不正直) 불충분(不充分) 불분명(不分明)
 불명료(不明瞭) 불명확(不明確) 불확실(不確實) 불활발(不活発) 불친절(不親切)
 부자연(不自然) 불공정(不公正) 불공평(不公平) 불균일(不均一) 불성실(不誠實)
 불신실(不信實) 부정확(不正確) 불완전(不完全) 불유쾌(不愉快) 불충실(不充實)
 불건실(不健實) 불건전(不健全) 불안전(不安全) 불철저(不徹底)

以上、日本語と韓国語の「不」の下接語と結合語の品詞性を以下の表3にまとめる。

表3 日韓「不」の下接語と結合語の品詞性

下接語	結合語(日)	語数(%)	結合語(韓)	語数(%)
N(100%)	AN	24(100%)	N	3(27%)
			AN	7(64%)
			ANV	1(9%)
VN(100%)	N	17(35%)		
	AN	31(65%)	AN	7(18%)
			VN	32(82%)
AN(100%)	AN	36(100%)	AN	9(100%)
ANV(100%)	AN	8(100%)	AN	1(100%)
ANV+AD(100%)			AN	1(100%)
AN+AD(100%)			AN	24(100%)

表3からわかるように、日本語と韓国語の「不」の下接語がNである場合、日本語の「不N」は全てANになるが、韓国語の「不N」はNまたはANになる。下接語がANである場合は、両言語の「不」との結合語は品詞転換がみられない。しかしながら、下接語がVNである場合、日本語の結合語はNまたはANになり、韓国語の場合は多くの語が動詞性を保有したまま、品詞転換はみられない。また、韓国語において、下接語は形容詞性名詞に加え副詞性を持つ語もみられ、この類の語は「不」と結合した後に副詞性を持たなくなり、形容詞性名詞になる。

6. 日韓両言語の品詞転換機能の相違点がある原因

日韓両言語の「不」の下接語が動名詞である場合、その差異は顕著である。

- (25) a 介入⇔不介入 介入する⇔*不介入する
 成立⇔不成立 成立する⇔*不成立する
 適応⇔不適応 適応する⇔*不適応する
 b 개입(介入)⇔불개입(不介入)

개입하다 (介入 hada) ⇔ 불개입하다 (不介入 hada)
성립 (成立) ⇔ 불성립 (不成立)
성립하다 (成立 hada) ⇔ 불성립하다 (不成立 hada)
적응 (適応) ⇔ 부적응 (不適応)
적응하다 (適応 hada) ⇔ 부적응하다 (不適応 hada)

下接語が動名詞である場合、日本語の結合語は動詞性を失い、名詞または形容動詞性名詞になり、韓国語は、動名詞下接語の語数全体の82%が動詞性を失わず、「不」と結合前後に品詞転換がみられない。その一因として両言語の形態上の制約が考えられる。日本語の「する」の否定は「しない」であり、「ないする」とは言えない。即ち、否定要素を「する」の前に置くことができない。これに対して韓国語では否定要素は、述語の前に置くことが可能である。

(26)안 하다 an hada (ない する) 못 하다 mos hada (できない する)
안 먹다 an meogda (ない 食べる) 못 먹다 mos meogda (できない 食べる)

(26)のように韓国語の固有語において、否定要素が述語の前に置く形態があるので、否定接頭辞が「hada」の前に置く形態が韓国語では受け入れやすいことが考えられる。

また、下接語が動名詞である場合、日本語の「不」の結合語の65%が動詞性を失い、形容動詞性名詞になるため、状態性を表しやすい。一方で、下接語が動名詞である場合、韓国語の「不」の結合語の82%が動詞性を保有していることから、韓国語の「不」の結合語は、動詞性（動作または状態の変化）を表わせることが考えられる。

7. おわりに

日韓両言語の否定接頭辞は単語の否定、品詞転換機能、意義の添加機能において極めて類似している。本稿では、日韓両言語の否定接頭辞の特徴を概観した上で、両言語の類似点である品詞転換機能に着目し、「不」の下接語と結合語の品詞性について対照研究を行った。日本語の「不」の結合前後は、形容動詞性名詞に転換する機能がみられる。下接語が動名詞である場合、その結合語は動詞性を失う。韓国語において、下接語が名詞または形容詞性名詞である場合、品詞転換機能は日本語と類似しているが、下接語が動名詞である場合、結合語の多くが動詞性の形態を保有している点で日本語と異なる。それは、日本語においては否定要素を述語の前に置くことができず、韓国語の固有語では否定要素を述語の前に置く形態があるため、形態上で受け入れやすいことが考えられる。また、意味上では、日本語の「不」の結合語は動詞性よりも状態性を持ち、韓国語の「不」の結合語は動詞性も表すことができる。

日韓両言語の「不」は、品詞転換機能のみならず、同形結合語の意味、各品詞の下位分類による使用形態、接尾辞「的」との結合関係においても相違点があるが、今後の課題とする。

参考文献

日本語

- ・近藤公久、天野成昭編著 2000『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第7巻』三省堂
- ・塚本秀樹 2008「日本語と朝鮮語における品詞と言語現象のかかわり:対照言語学からのアプローチ」『アジア・アフリカの言語と言語学』(Asian and African languages and linguistics)no.3、pp. 29-46
- ・野村雅昭 1977「造語法」『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』pp. 245-284
- ・野村雅昭 1973「否定の接頭辞「不・無・非・未」の用法」『国立国語研究所論集ことばの研究』4、pp. 31-50
- ・朴景淑 2015「字音接辞「不」と「非」との相違点」國語學懇話會編『みくにことば』中日出版社 pp. 182-193
- ・飛田良文(ほか) 2007『日本語学研究事典』明治書院
- ・山田孝雄 1936『日本文学概論』寶文館
- ・『デジタル大辞泉』(オンラインデータベース) <http://japanknowledge.com/library/>による
- ・『日本国語大辞典(第二版)』(オンラインデータベース) <http://japanknowledge.com/library/>による

韓国語

- ・국립국어원 표준국어대사전 <http://stdweb2.korean.go.kr/main.jsp>による
Gungnipgugeowon Pyojungugeodaesajeon (国立国語院 標準国語大辞典)
- ・노명희 2005 국어학총서 49『현대국어 한자어 연구』태학사
(No myeonghui, 2005 国語学叢書 49『現代国語漢字語研究』taehaksa)

用例出典

- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス(通常版)BCCWJ-NT
- ・국립국어원 말뭉치 <https://ithub.korean.go.kr/user/corpus/corpusSearchManager.do>による
(国立国語院 コーパス)

付記：本稿は、名古屋言語研究会例会(第157回)にて口頭発表した論文に修正、加筆を加えたものである。